

「ビーチハンドボールの構造特性に関する一考察」

～戦術トレーニングの視点から～

小山多佳子(小学校課程・保健体育副専攻)

<序論> 研究動機及び目的・研究方法

今日、ハンドボールは世界中でプレーされ、楽しまれている。さらにその普及にとビーチハンドボールという新しいスポーツが作られた。ゲーム理念やルールの単純さはそのままに、より取り組みやすく、幅広い年代の人たちが楽しめるように工夫されている。著者自身やってみて裸足で行う開放感や親近感、ボーナスポイント制の得点など取り組みやすさに魅力を感じた。2つの種目はもとは同じスポーツであり、ゲームの特性や考え方は基本的に同じであるが実際のゲームを見るとビーチハンドボール特有のプレーや考え方が見受けられる。2つの種目の違いをはっきりさせビーチハンドボール独自の特性を明らかにしていきたい。よって本研究の目的はビーチハンドボールの発生過程やルールについて検討することにより、ビーチハンドボールの構造特性を明らかにし、教材としてのよさを確かめることである。

ビーチハンドボールはまだ日の浅いスポーツであるため文献が限られている。そこで特徴を明らかにするため国際ハンドボール連盟(IHF)から最新のルールを取り寄せたり、ドイツハンドボール連盟(DHB)発行の資料などを翻訳したりして研究の材料とした。

<本論> 第1章 ビーチハンドボールの発生的考察

ニュースポーツを発生的な視点から見た分類をすると次の5つになる。科学技術の進歩によるもの、民族スポーツからの普及、既存のスポーツの簡易化、実用的な労働形態からの派生、「気」の世界に接近するスポーツであり、ビーチハンドボールは既存のスポーツの簡易化に分類できる。イタリアで発生したといわれているが、今やイタリア、ポルトガル、ギリシャなどの南欧諸国で人気があり、多くの観衆の興味をひいている。

ドイツでは1994年からビーチハンドボールの構想が始まっており、今では上位20チームによる年間最終試合が行われるまでに発展した。国際的な発展としては、2001年2月にブラジルで世界選手権が開催されることになっており、秋田でのワールドゲームズへの掛け橋となっている。

第2章 ルールから見たハンドボールとビーチハンドボールの特性

ハンドボール、ビーチハンドボール共にそれぞれルールブックが存在するがビーチハンドボールに関しては、ハンドボールのルールのもとに成り立っている。ハンドボールのルールの適用や参照の項目は多くあり、2つのルールブックがあつて初めてビーチハンドボールのルールが効力を発揮することになる。各ルールの項目を物的条件と行為的条件とに分けて比較した(別紙参照)。

第3章 戦術学習から見たビーチハンドボールの特性

ボールゲームにおいて一般的にルール・戦術・技術・体力・協調力という構造を組み立てることができる。ルールがあつてはじめて戦術が考えられ、ルールが変われば戦術も変わってくるのである。つまりルールと戦術は絶対的に切り離すことができないのである。またハンドボールに比べ、1つ1つの局面は小さくなるが構造特性のとらえやすさに変わりはない。さらにビーチハンドボールにはボーナスポイント制の得点があるため、ゴールキーパーが出てくることが多く、自然と数的優位の状況を生み出しているのである。数的優位の状況を作ることができれば、いろいろな戦術が考えられ、1番の楽しさである「シュートを入れる喜び」を存分に味わうことができるのである。ビーチハンドボールという教材による戦術学習をすることで、チームの戦術力を育て、さらにゲームの楽しさを感じることができると思われる。

<結論>

ビーチハンドボールはできて間もないニュースポーツであるがその魅力は想像以上に大きいものであった。ビーチハンドボールの独自のルールが戦術学習を容易にしていることが明らかになった。またゲームの構造がとらえやすく戦術学習をしやすいことも明らかになった。ゲームの本当の楽しさを知り、うまくなるために戦術学習は有効な手だてであり、ビーチハンドボールはその方法の1つとして適した教材であるといえる。

さらに「浜辺」という条件ではなくとも、グラウンドや体育館において4対4の簡易ハンドボールとして戦術学習をしていくことも可能であると考えられるし、その中からゲームの本当の魅力を感じることができると思われる。今後の課題はビーチハンドボールの戦術学習としての有効性を実践の中で確認していくことと、技術や体力、協調力の面から見たビーチハンドボールのよさを実践の中で探っていくことである。